江戸巡り雙六（山田屋板）　同（○中略）

扨この後一鋪の紙に去るしたる雙六いで來にけり、名目雙六（天台の名目を去るす）官職雙六（位階の昇進を去るす）あり、これらみな飛雙六にて、童子をしてそのことを去らしめんが爲也、猶くだりては、淨土雙六、ばけ物雙六等あり、また一變して道中雙六といふものあり、そのはじめを詳にせずといへども、余（○山崎美成）が藏したるものに、京師の圖に二條の御城の天守をゑがけるを見れば、天守燒亡の前にいで來りしものにやあらん、これは采の目の順に數をかぞへ進めり、近松作の丹波與作と云淨るりに、道中雙六といふげいとあり、これ〳〵御らんせ、うたしやんせ、是こそ五十三次を、ゐながらあゆむひざくりげ、馬はいしい道中すご六、南無諸佛ぶんしんと、かいた六字を六かくの、さいかさくら木、花の都をまん中に、思ひ〳〵のゑるしをおゐてとあり、これを思ふに、常のさいを用ず、右の六字をゑるしたるは、淨土雙六よりうつり來にけるものなり、また遊學往來に、毘沙門雙六、七雙六、一二五六雙六、一ト半打盗人隱、有哉立、島立、太々立、十六目石、百五減、十不足、郎等打、これらの戯、いまこと〴〵く考ふべからず、東鑑の四一半、古今著聞集の七半の類などにもあらんか、記して後考を俟つ、後世坊間に刻する所、おでゞこ雙六、福神雙六等、枚擧にいとまあらず、

右拙案一篇は、松蘿館珍藏のふるき雙六くさ〴〵を、こたび耽奇會に出し給へるに付て、思ひよれるふしもあらば、聞まほしとのことなりければ、聊そのよしゑるして贈り侍るになん、

文政乙酉（○八年）春正月二十日　山崎美成記

〔天香樓偶得〕選仙圖

今俗集古仙人作圖、爲賭錢之戯、用骰子、比色先爲散仙、次陞上洞、以漸而至蓬萊、大羅等列則衆仙慶賀、比色時首重緋四爲德、次六與三爲才、又次五與二爲功、最下者么則謂之過、凡有過者謫作採樵、思凡之類遇德復位、此戯宋時已有之、王珪宮詞云、盡日間牕賭選仙、小娃爭覓到盆錢、上籌須占